魔道具シリーズ①

携帯電話

泡蔵
AWAZO

目　次

プロローグ……4
ナビゲーション……5
写メール……67
スケジュール……147
あとがき……252

１９８５年。ＮＴＴより日本で初めてのポータブル電話機「ショルダーフォン」が発売された。

携帯電話ではなくポータブル電話機と呼ばれているのは、現在使われている片手で持てる携帯電話とは違い、少し大きめなハンドバック程の大きさで、商品名の通り本体にはショルダーストラップが着けられ重量はなんと3キロもあった。一応持ち運びできるので携帯電話と呼べなくもないが、現在使われている物と比べると携帯電話と言うにはおこがましい程の大きさであった。

その２年後、ハンディータイプと呼ばれる携帯電話が発売され、翌年ＩＤＯ（現在のａｕ）が携帯電話業界に参入以来、端末の発展はめざましく、まさに日進月歩の速さで小型化が進んでいった。

そして１９９７年にメールサービスが開始。翌年ＣＤＭＡ方式の電波サービスの開始により電波が強化され、更に翌年１９９９年にはインターネット接続サービスが開始されると携帯電話の様相が大きく変わる変換点となった。

こうして年を重ねる毎にめざましい進化を遂げてきた携帯電話業界だが、20世紀最後の年、カメラ、オーディオ機能付き携帯電話が発売。更に２００６年10月24日に開始されたＭＮＰにより市場は更に活性化していく。

そして２００８年７月８日。Ａｐｐｌｅから携帯電話に革命を起こす、ｉＰｈｏｎｅ３Ｇが発売され、一気に携帯電話はスマートフォンに塗り替えられる。

今にして思えば、世紀末からの数年間、スタンダードな機種から少し突飛な機種、誰にも見向きもされない機種まで、多種多様な携帯電話が発売されては消えていく最も華やかな時代だったのかも知れない。

これはそんな時代の影で生まれた携帯電話にまつわる物語である――

ナビゲーション
設定
フォーカス
撮影
プレビュー
ムービー

1

俺は睨むようにテーブルに置かれている携帯電話を見つめていた。

「なんだってんだよ」

声を殺し、文句を言ったところで携帯電話が答えてくれるわけでもないが、文句もつけたくなることがたった今起こったのだ。と言っても別に壊れたってわけでも、通話中に電池が切れたわけでもない。そんな簡単に想像できる事件だったらどんなに楽だっただろう。

それではどんな事件がおこったのか？　何故俺がこんなにも腹を立てているのかと言うと、俺の意志とは関係なく機種変更された理不尽な事件に腹を立てているのだ！

いや、正確に言うとそれも違うか？　このわけのわからない状況に頭がついていかず、イライラしていると言うのが適切な表現かもしれない。

それは、つい十数分前のこと――

午前0時を過ぎていると言うのにアパートの呼び鈴が鳴った。

こんな夜中に突然訪ねてくるような恋人もいなけりゃ友達だっていない。きっと部屋を間違えたのだろうし、夜中に訪ねてくる非常識な奴（ちょっと羨ましいが）など無視してやればいいだけのこと、普段の俺ならそうしただろう。しかし、今思い返しても自分の行動が信じられない。なにを考えていたのか、そそくさと立ち上がると確認することもせず扉を開けてしまったのだ。

それがいけなかった。後悔先に立たず、死んでからの医者話、ホント後の祭りだ。

百万歩譲って知り合いだったら笑って許せたかも知れない。まぁ友達のいない俺にはあり得ないことなのは

身にしみているはずなのにこの失態……当然、扉の前にいたのは俺の知らない男だった。
その男はありきたりなグレーのスーツに身を包み、髪の毛を綺麗に七三に分け、極めつけは黒縁のメガネを掛けた典型的な、まるでマンガにでも出てきそうなセールスマンの出で立ちだったのである。
しかも男は近所迷惑も考えず、夜中だと言うのに元気よく「始めまして！　ワタクシこう言う者です」と頭を下げ名刺を差し出してきたのだからたまらない。
そして再び自分の思考回路を疑いたくなる行動をしてしまったのである。
勢いに呑まれてと言うか、笑顔で迫りくる男が恐ろしかったと言うか、とにかくどうかしていたとしか言いようがないのだが、俺はなんと差し出された名刺を素直に受け取ってしまったのだ。
こうなるとセールスマンは図々しい。しかも、この男はそんじょそこらのセールスマンの非ではなかった。名刺に視線をそらした僅かな隙を突いて押し入ってきたかと思うと素早く扉を閉め玄関にカタログを並べたのである。その素早さといったら、まさに神業としか思えない芸当であった。
「ちょ、ちょっと待ってください。なんなんですかあんたは？」
「いやいや、おかしなことをおっしゃいます。たった今名刺をお渡ししたではありませんか。あっ、名前が読めませんですよね。いえいえ気にすることはございません。ワタクシの名前は少々特殊ですので。それでは改めまして、ワタクシ携帯電話のセールスマンをさせて頂いております『毛井多井宇利夫（けいたいうりお）』と申します」
「け、けいたい……なんだって」
「ケイタイウリオと申します。当然本名じゃありませんが、この名前にさせて頂いてからはお客様の受けがよろしいので、この名前を名乗らせて頂いております」
男はそう言いながら深々と頭を下げた。
「挨拶はこのくらいにさせて頂きまして、本日はお客様に最新の携帯電話をご紹介するために伺わせて頂きま

した」

唖然としている俺など気にもせず満面の笑みを向ける。その笑顔がなんと腹の立つこと。まさに営業スマイル！　貼り付けた笑顔とはこのことを言うのだろう。

しかし、携帯電話のセールスマンなんて聞いたことがない。しかも0時を過ぎて営業する勤勉なセールスマンがいるとは驚きである。

「セールスマンなのはわかったけど、今何時だと思ってるんだ」

「はい、只今午前0時13分になります」

「お前喧嘩売ってるのか！　非常識だって言ってんだよ」

「なにをおっしゃいます。昨今、時間など気にしていたらセールスマンなどやっていられません。しかもワタクシの手には素晴らしい商品があるのですから、夜中だの早朝だのと言っている場合ではないのです。しかもしかも、お客様はこの商品を必要となさっていらっしゃる。そうとわかれば一刻も早くお持ちせねば！　とはせ参じたわけであります。はい」

「なに訳のわからないこと言ってるんだ？」

「ですから携帯電話のご紹介に伺い――」

「いやいや待て待て、携帯電話のセールスマンなのはわかったから。でも携帯電話なら持ってるし、変える気もないから帰ってくれ」

俺は話が長くなるのを避けるため手にした携帯電話を男の前に突き付け話を遮った。こんな奴の話など聞いてられるか、とにかく早く追いかえさなくてはいけない。特に今はこんな男に構っている暇など一秒たりともないのだ。

俺が焦っているのには理由がある。せっかく出会い系サイトで会った女の子といい感じでメールのやり取りをしている真っ最中なのに、返信が遅れたらどうしてくれると言うのだ。

「まあまあ、落ち着いてください。おっしゃることは良くわかります。機種を変えることによって様々な弊害が出るのではないかと懸念していらっしゃるのでしょう。確かに昨今のナンバーポータビリティでは、通信会社を変えてしまったらメールアドレスが変わってしまいます。ですがご安心ください！　我が社の開発した携帯電話は、何処の通信会社様の騎手であろうとプランであろうと関係ございません。ただ、このようにケーブルで繋げるだけで、コンピュータを使わずに、シム情報からあらゆるデータの移行まで完璧にやってのけるのです」

そう言って男はケーブルで繋がった携帯電話を二台取りだした。

「ちょっと待てっ！　それ俺の携帯じゃないか」

いつ取られたのか全くわからなかった。今の今まで俺の手にあったはずの携帯電話が何故か男の手の中にある。しかも唖然としている俺を尻目にデータ移行は終わってしまったのか、ケーブルを抜くと満面の笑みで新しい携帯電話を俺の手の上に置いたのだった。その間1分も掛かっていない。

「この早さも我が社の売りでございます。そちらの携帯電話は今この時から使えますので、どうぞお使いくださいませ」

「だから待てって言ってるだろうが！　勝手なことしやがって早く戻せよ。変えるつもりないって言ってるだろう」

俺は怒りにまかせ男の胸ぐらを掴もうとしたのだが、この狭い玄関でどうやって動いているのか、胸ぐらを掴むどころか、男に触ることさえできない。

「落ち着いてくださいませ。今回はテスト的に使って頂ければ結構でございます。明日一日使って頂きまして、それでもお気に召しませんでしたら元に戻させて頂きます。当然、料金も頂きません。その携帯電話には、それはもう素晴らしい機能が付いておりますので、お試しして頂ければきっとご満足頂けるかと思います」

今考えればコレが最後のチャンスだったのかも知れない。しかしこの時は、本当にどうかしていた。早く男を追い出しメールを続けたかったのも事実だが、あろうことか携帯電話に興味を持ってしまったのである。

「本当に、料金いらねぇんだな。明日一日だけだぞ！　使ったら元に戻してくれるんだろうな」

「ご安心下さいませ。我が社はお客様第一で営業させて頂いておりますので、お客様がお気に召しませんでしたら迅速に原状復帰作業に移らせて頂きます。それでは明日、もう一度伺わせて頂きますのでよろしくお願いいたします。夜遅くに申し訳ありませんでした。あっ、その携帯電話には、ナビゲーションシステムが付いておりますので是非ともお使いくださいませ。きっとご満足頂ける機能となっておりますので、それでは明日、失礼させて頂きます」

そう言うと男は深々と頭を下げ、来た時とは真逆に静かに部屋を出て行くのだった。

こうして俺はテーブルに置かれている携帯電話を睨み付けていると言う訳だ。

それは二つ折りのなんの変哲もない携帯電話で操作方法も今までのと殆ど変わらなかった。その御陰もありなんのストレスもなく使いこなすことができたのは不幸中の幸いであった。

俺は一つ溜め息を付いてからメールを再開する。ホントあらしのような出来事だったので時間はあまり経っていない。これくらいの返信の遅れは許容範囲だろうと願いながらメールを送る。かなり話は盛り上がっていたのとくだらないセールスマンとのやり取りで気分が高まっていたのも相まって文章の最後に「会おう」と書き込んで送ってしまった。

何処かの偉い人が「人間にとって怒りとは最大のパワーである」と言ったそうだが、ホント怒りがパワーになることを実感した。本来ならもうチョット慎重にことを運ぶのだが、勢いとは恐ろしい。一瞬「少し早まっ

たか？」と思ったが今更後悔しても遅い。「まさか返事がないのでは？」と心配になったが、俺の心配は杞憂だったらしくメールは直ぐに送られてきた。

「よっしゃ～」

しかもメールには会うことを承諾する言葉が書かれていたのである。こうなれば気が変わる前にたたみ掛け明日会えるか確認する。アダルト出会い系サイトなのでがっついていると思われ警戒されるかも知れないが、返ってきたメールには「楽しみにしてるね♡」と書かれていた。ハートマーク入りである。これは期待せざるを得ない。

メールを終えた俺は、先程までの怒りなど忘れ、明日に備え風呂に入り、そそくさと布団に潜り込み妄想を膨らませながら眠りについたのだった。

＊　＊　＊

翌日――

「ダメか……」

俺は待ち合わせ場所で30分も待っていた。当然昨日約束を取り付けた女と待ち合わせに来ているのだが、肝心の女が待てど暮らせど来ない。

何度かメールを送ってみたのだが返信は一度もない。それどころか送ったメールが戻ってくる始末だ。これはいいようにからかわれたらしい。

まぁアダルトサイトでは良くある話だが、直メールが貰えたので安心したのがいけなかった。世の中そんなに甘い話は落ちていないと言うことか……。俺はふて腐れながら渋谷の街をうろつくことにした。このまま帰

るのもしゃくだし、時間くらい潰して帰らないと気分的に負けた感じがする。欲しいものはないが買い物がメインで来たと思わないとわざわざ渋谷くんだりまで来た俺がバカみたいだ。とどんな言い訳を思いついたところで負けなのには変わりないのだが……

こう言う時、自分の性格が嫌になってくる。周りを見渡せばナンパをしている男達がいると言うのに、俺はそんな奴等を横目に通り過ぎていくことしかできない。実際はあまりうまくいっている奴もいないが、ダメなら次、またダメでも次、とめげずに声をかけ続けている。ああ言う性格がホント羨ましい。メールでは結構大胆なことを言っているが、ナンパなどしたら俺のガラスの心臓は無残に砕け散ってしまうだろう。ホント情けない。次に生まれてくる時には、ナンパくらいできる人間に生まれてきたいものだ。

そんなバカなことをボンヤリと考えながら人で溢れたセンター街を歩いている時、携帯電話が鳴った。

もしやと思ったが、それこそ甘い考えだった。携帯電話を開けてみると何処で調べたのか、昨日のセールスマンからメールが届いていたのだ。

――あのヤロー、持っていった携帯のデータ見やがったな……

騙されたのと相まって怒りがフツフツと湧き上がってくるのを感じながらメールを開く。そのまま読まずに消すことも考えたが、怒りのせいか読まずにはいられなかった。

〈昨日は、どうもありがとうございました。携帯電話の具合はいかがでしょうか？　まだナビゲーションシステムをお使いになっていないようですので是非お使いください。今のあなたに必ずお役に立つことでしょう〉

そんな訳のわからないことが書かれていた。

「なんだこれ？」

個人情報を見たのと訳のわからないメールに、文句を打ち返してやろうかと思ったが、そんなことをしてもどうにもならないのでやめておこう。それよりもナビゲーションシステムと言う単語が気になった。

――今の俺に役立つナビってなんだよ。何処も探してないっての……

そう思いながらも、どうせ行くあてもなかったのでちょっと遊んでみることにする。ナビ付きの携帯など持ったことがないので良くわからないが便利なのだろうか？

メールを閉じ簡単な画面操作からナビゲーションシステムを立ち上げ渋谷の街を拡大してみる。すると地図の上に現在俺が立っている青い点とゆっくりと動く赤い点が表示された。自分がいる位置が表示されるのはわかる。しかしこの赤い点は一体なにを表示しているのだろう。頭に「？」マークを浮かべていると画面にメッセージが現れた。

［ポインタを操作して赤い点をクリックしてください］

言われたとおり十字キーでポインタを操作し、ゆっくりと移動する赤い点を追いかけクリックする。すると漫画の吹き出しのようなウィンドウが開かれ顔写真と「ナンパ待ち」と言う文字が現れたではないか。

「なんだこりゃ？」

なんでこんな写真が出てきたのか？　なんでこんな文字が浮かび上がったのか？　俺にはなんのことだかさっぱりわからなかった。別に文字が理解できなかった訳じゃない。いきなり顔写真と「ナンパ待ち」などと言われてもなんのことだか理解できなかったのだ。しかし、赤い点はドンドン俺がいる青い点に近づいてくる。まさかと想ったが顔を上げると目の前から写真の女が近づいて来るじゃないか。

「えっ……」

この時の驚きをどのように表現すればわかって貰えるだろう。いや、言葉では表せない程驚いた。ただ驚いた。驚きすぎて周りの目も気にせず、呆然と横を過ぎる女を視線で追いかけてしまったくらいだ。

これは一体どう言うことなのだろうか？　なぜ携帯に映っている女が俺の横を通り過ぎて行ったのだ？　まさかこのナビって……

俺は信じられない気持ちを押し殺し、携帯を握り直すと別の赤い点をクリックしてみた。すると同じように「ナンパ待ち」の文字と共に写真が現れた……

「ま、まさかな……」

事実たった今ナビに出た写真の女が横を通り過ぎたのだから疑う余地はないのかも知れないが、俺はどうしても信用できなかった。これは確かめる必要がある。都合のいいことに今度は動いていない。はやる気持ちを抑え、赤い点がある場所に向かい女を捜す。

いた！

ガラス張りの奥に見えるコーヒーショップを背に写真の女が立っていた。信じられなかったがこれはもう信じるしかない。この携帯ナビは間違いなく女をナビしている。

「スゲェ～。どうやってるんだ」

女は少し暇そうに携帯電話をいじくっていた。きっとナンパされるのを待っているのだろう。と言うことは俺が声をかけてもナンパは成功するのか？　いやいや向こうにも好みがあるから１００％成功することはないだろうが、ナンパ待ちをしていない女よりも格段に成功する確率は高いだろう。ナビには結構な数の赤い点が表示されている。表示されている女に片っ端っから声をかけていけば誰かしらにヒットする。ナンパに成功すればその先だって期待できる。すっぽかされたことなんてチャラにできるかも知れない。

と思ってみたものの、情けないことに俺は成功確率が高いからと言って声を掛けられるような男じゃない。

取りあえずこの女はパスすることにしよう。言い訳に聞こえるだろうが、他にどんな子がナンパ待ちをしているのか気になったのだからしかたがない。俺は視線を携帯電話に戻した。

地図の上には何個も赤い点が表示されている。中には消えていくのもあれば新たに現れるのもある。きっと消えたのはナンパされている最中か成功して移動したのだろう。新たに増えたのは、単純にナンパされたいと思ったのだろう。中には二つだったり三つだったりと点が集まっているところがあるが、これは複数で待っているのだろう。そう考えると意外にナンパ待ちをしている女が多いことに驚かされる。

俺は面白くなって薄ら笑いを浮かべながら次々と赤い点をクリックしていった。中には「お前は声掛けられねぇだろ」と言う奴から「こんな可愛いのに」って子まで色々いる。実際に、声を掛けられているところにはまだ遭遇していないが、本当にこの子達は、声を掛けられたらついて行くのだろうか？　まぁ誰でもってことはないだろうが、みんななにかを待っているような気がした。

俺は携帯片手にグルグルと渋谷の街を歩き回った。ナンパ男達がナンパ待ちをしていない女に声をかけている姿を見ているのは意外にも楽しかった。そして、しばらくすると画面に突然ピンクの点が現れたではないか。なんで色が違うのかわからないが、早速ピンクの点をクリックしてみると今まで通りウィンドウが開き写真が表示された。

――スゲェ～可愛いじゃん！

今まで見た写真の中でダントツに可愛い。俺は写真に見とれているとあり得ない文字を発見した。なんと写真の下には「H待ち」と言う文字が表示されているではないか。

「おっ……おい……」

焦った。正直、携帯を落としてしまう程俺は焦った。本当なのか？　まさかそんな訳ないと思いながらも俺は女の子が歩いている場所まで移動してみると、確かに写真の女の子が歩いている。

携帯電話を見ながら俺は無意識に写真をクリックしていた。すると地図が消え女のデータに切り替わる。

［名前：稲森里菜（りな）　年齢：22歳　ファミリーレストランアルバイト］

簡単なプロフィールだったが、まさかこんなデータまで見られるとは思っていなかった俺は、再びビックリして携帯電話を落としそうになった。

――こんなのまで出るのかよ……

どのようにしてこんなデータを集めているのかわからないが、実際の里菜は写真よりも幼く見えた。これなら10代、高校生と言っても通るだろう。ゆったりとした薄いグレーのサマーニットに裾に白いラインが2本の入った紺のプリーツスカートはミニではあるがそこまで短いわけではない。どう見ても男を誘っているようには見えない。しいて言うならゆとりのあるサマーニットを着ていても大きな胸が隠しきれていないところだろうか。

俺は距離を置きゆっくり後を追いながら、再び携帯に目を落とすと画面からはデータが消え、あり得ない文字が浮かび上がっていた。

［早くしないと他の男に声を掛けられてしまいます。
かける言葉は「エッチしよ」だけで、里菜ちゃんとホテルに直行できます］

――な、なんだよこれ？　これって信用していいのか……

ナビは確かに女の場所を案内してくれた。しかし、こんな声のかけ方をしたら逃げられてしまう。いや、殴

られてしまうかも知れない。だが、これが本当ならここで少しの勇気を出せば、目の前にいる可愛い女の子とHができる。ほんのチョット勇気を出すだけで……

――どうする。どうすればいいんだ……

モタモタしている時間はない。これだけの上玉だ。直ぐに肉食獣のようなナンパ男が群がってくる。

俺は決断した。

当然声をかける方にだ。ほんの少し恥をかくだけで、もしかするとエッチができるかもしれないのだ。こんなに美味しいことはない。それでも、初めてナンパする緊張から心臓が壊れるんじゃないかと思う程早くなっている。

とりあえず軽い言葉から声をかけることにしよう。いきなり「エッチしよ」など言える訳がない。俺は、飛び出しそうな心臓を抑え里菜に近づいていった。

脚が震えている……里菜の後ろにつき、同じ速度で歩くのだが、なかなか声を掛けられない。

それでも俺は意を決して携帯電話を握り締め声を振り絞った。

「あ、あの……お茶でもしませんか……」

なんとダサイ台詞を選んだのだろう。言っている本人が一番恥ずかしい。里菜は一度振り返ると何事もなかったように歩き出してしまった。俺はガッカリしながら携帯へ視線を落とす。すると新しいコメントが表示されていた。

［そんな声のかけ方では成功しません。「エッチしよ」意外、反応無し］

まるで、行動を見ていた様なコメントだった。しかし、不思議に思う余裕もなく直ぐに里菜を追っかけると

勢いで声を掛けた。
「エ、エッチしよ」
殴られることを覚悟した。俺の言葉が聞こえた何人かの通行人は変態を見るような目で通り過ぎていく。もの凄く恥ずかしかった。しかし、里菜は立ち止まると満面の笑みで振り返り俺を迎えてくれた。
「うん。いいよ。それじゃあホテル行こう」
そう言うと里菜は平然と俺の手を取り歩き出した。
もうなにがなんだかわからない。ナンパが成功したことは確かなのだろう。しかも里菜の足はホテル街へと向いている。
俺は手を引かれながら里菜に話しかけることもできずに後ろ姿を見つめていた。まさか、本当にあんな声のかけ方でOKが出るとは……里菜は、時々振り向くと笑顔で俺の顔を見ている。なんだかわからないが俺のことを気に入ってくれているようだ。
道玄坂で声をかけたので数分歩いただけでホテル街へ着く。
まだ日が高いのにホテル街は、結構人通りが多かった。まぁ、このメイン通りにはライブハウスやアミューズメントパークがあるので人通りも多い。しかし、一つ道を入ってしまえば、歩いている人などいなくなる。
「何処のホテルでもいいよ。すっごく我慢してたの。ビルの陰でしちゃってもいいくらいなんだから……でもやっぱりホテルで思いっきりして欲しいな。ねぇ、どうする。何処に入るの？」
「ど、どこでもいいんだけど……」
やたら緊張していつもの調子が出ない。あまりにも大胆なので手に余っている。俺はキョロキョロと周りをぎこちなく見回していた。
そんなモタモタする俺を尻目に、里菜は本当に我慢できなかったのかミニスカートを捲り上げるといきなり

パンティーの中に手を突っ込みオナニーを始めやがった。
「アッアッ……早く決めてくれないとここでしちゃうから……」
「もうしてるよ！」と言うツッコミを飲み込み俺は呆気にとられていた。パンティーの中では怪しく手が蠢き、クチュクチュといやらしい音を立てている。
「ちょっ、ちょっと待て！」
いくらなんでもそれは困る。里菜は露出趣味でもあるのかサマーニットを捲り上げようとした。きっとそっち系の人が見たら喜べるのかも知れないが、そんな趣味に付き合える度胸はない。
俺は慌てて里菜の手を掴むと手近なホテルへと駆け込んだ。別に渋谷のホテル街に詳しい訳じゃないので、始めから何処でも良かったが、こうなっては本当に選ぶ余裕もない。
「なにしてるの……早く部屋決めてよぉ～」
文句を言われる程のんびりしていた訳じゃない。それなのに里菜は再びオナニーを始めている。いやずっとしていたのだろう。これまた選ぶ余裕もなく適当に空いているパネルボタンを押して、キーを貰うと直ぐにエレベーターに乗り込んだ。
予想はしていたがエレベーターに入った途端、里菜はおもむろにサマーニットを捲り上げると大きな胸を突きだしてきた。
「もういいでしょ。早く揉んでよぉ……ねぇ、早くぅ……」
露わになった胸にはヌーブラが着けられていた。こんな物があるから、谷間が強調され、おかしなことを考える男が増えるのだ。
「まだ、良くないって……直ぐ部屋に着くから、それまで待って……」
なんで俺が女をなダメなくちゃならないんだ。普通は、男の方が待ちきれず悪戯するってのが筋ってもんだ

ろう。

「もう。ムードって物を知らないんだから……いいよ。自分でするから」

ムードをぶち壊しているのはどこのどいつだと言いたくなる程ムードもへったくれもない。今度こそ突っ込んでやろうと思ったが、里菜はもう自分の世界に入り込んでいる。俺だってこんな悩ましい姿を見せられたら我慢できるわけがない。しかし俺まで暴走してしまったら収拾が付かなくなってしまう。俺はなんとか暴走しそうになるのを必死で制御していた。

「ハアァァ……気持ちいい……ずっと我慢してたから……アウッ……気持ちいいよぉ……」

里菜は気持ちよさそうにヌーブラの上から胸を揉み、もう片方の手で股間を愛撫している。しかもいやらしい音とパンティーに広がる染みを見ているだけで俺の理性は飛びそうになった。が……なんとか堪える。全く！

どうしてラブホテルのエレベーターってのは動くのが遅いんだ！

拷問のような時間が数秒続き、やっとエレベーターが止まる。廊下には人気はない、誰とも会わずに部屋に辿り着けそうだ。滅多に人と会うこともないのだが、里菜がこの状況なので、いらぬ心配をしてしまっている。

「着いたよ。早く部屋に行こう」

「まって……後チョットでイけそうなの……」

なんて女だ。この短時間で、登り詰めていたのか。そう言われても待っている訳にもいかない。俺は、嫌がる里菜を無理矢理エレベーターから降ろすと引きずるようにして部屋に押し込んだ。

「もう、強引なんだから……だったらエレベーターでしてくれれば良かったのに……」

なんとめげない女なのだろう。こんなスケベ女は、漫画かＡＶに出てくる空想上のキャラクターだと思っていたが、本当に存在するとは……しかも可愛いのだからたちが悪い

「でもいいよ……まず玄関でしてくれれば……ホラ、キミのもこんなに大きくなってるよ。苦しいでしょ……

だから、このまま後ろから入れて……」

いやらしい台詞を吐きながらパンティーを膝まで下げるとスカートを捲り上げ、丸い綺麗なお尻を突き出した。

「ホラ……早く入れてよ。準備はできてるんだから……」

可愛らしいお尻が目の前で揺れる。もう我慢も限界だ。俺は慌ててズボンを下ろすと欲望のまま後ろから抱きついた。

タップリと濡れた秘裂は、なんの抵抗も見せず男根を根元まで飲み込んでいく。

「アアァァァァ……凄い。入ってくるぅぅぅ……」

散々挑発されたのだ。挿入直後にガンガン突きまくってやろうと思っていたのに、挿入した途端動けなくなった。挿入しただけで今までに感じたことのない快楽が男根に襲いかかってきたのだ。

――うっ……なんだこれ……無茶苦茶気持ちいい……この絡みつくような感覚……これってもしかして……

ヒダが絡みつくように蠢いている。それなりにＳＥＸは経験しているが、こんな感触を味わったことがない。

「ハアアァァ……どう……気持ちいいでしょ……前の彼氏が言ってたんだけど……これって……『ミミズ千匹』って言う名器なんだって……アウッ……滅多に会えないんだってよ……だからタップリ味わってね……」

――やっぱりそうか……

前に調べたことがある。通常膣壁のヒダは50本程度で深さも2ミリ位と言われているのに対し、名器と名高い「ミミズ千匹」は、ヒダが百本以上存在し深さも3～4ミリあるらしい。その長いヒダが男根に絡みついているのだ。

初めて会う名器。俺は歓喜に震えていた。

「アウッ……は、早く……早く動いてよぉ……あとちょっとでイキそうなの……少し動いてくれるだけでイッ

ちゃうから……お願い……早くぅ……早くイかせてよぉ～……」

俺もそうしてあげたいのは山々なのだが、こんな気持ちいい穴の中で動かしたら直ぐに出てしまう。挿入して数秒で行くなど俺のプライドが許さない。しかしこの気持ちよさ……動かしたい欲望には勝てるわけがない。俺はフィニッシュ覚悟で、いきなりトップギアに入れ激しく腰を振った。

「アアアァァ……凄い！　凄いよ……アッ、イクッ……イッちゃう……イクッ、イクゥゥゥゥ……」

オナニーで盛り上げてくれていたことを神に感謝し、俺は射精しながら腰を動かした。本当は俺も止まって快楽を味わいたいが、少しでも長持ちしていたと思わせたい。それでも射精している時に動くのはキツくて腰を止めてしまった。なんだか情けない……

それはそうとなにも考えず中出ししてしまったが、里菜は精液を味わうように秘裂をピクピク痙攣させている。その刺激が男根に更なる力を与えてくれた。

「ハァハァハァ……素敵だよ。全然小さくならない……もっと気持ちよくしてくれるんだね……嬉しい。でも、今度はベッドの上で可愛がって欲しいな……」

見た目に似合わずなんてアグレッシブな女なのだろう。里菜は男根を抜くと大きく肩で息をしながら扉を開く。流石ラブホテル。扉を開ければ直ぐにベッドだ。

「こんなの履いてたら歩けないから……いらない」

そう言って娼婦のようにパンティーを投げつけるといやらしく微笑んだ。なんて可愛い表情をするんだ。赤く染まった頬、蕩ける瞳が男根を刺激する。

「アアァァ……キミのが流れ落ちてくる……いっぱい出たんだね。でも、これだけじゃ足りないよ。もっとキミの精液頂戴」

きっとこう言う女を「魔性の女」と呼ぶのだろう。自分の言葉で男が夢中になることを知っている。しかも

里菜はベッドに向かう途中、一枚一枚洋服を脱いでいき、最後にヌーブラを引きはがしてベッドに横になった。
「早くぅ……もっとエッチしよ……ここに入れて」
脚を大きく開き両手で秘裂を開けながら俺を挑発する。何処まで男を喜ばせれば気が済むんだ。こんなことをされて冷静でいられる男が何処にいる。俺は猛スピードで服を脱ぐとベッドへ飛び込んだ。
「キャアァァァ～♡」
歓喜の叫び声が上がる。里菜は俺より先に男根を握ると秘裂へ導き、勢いを殺さず挿入した。まさに神業！
慣れてらっしゃる。
「ハアァァァ……素敵……奥まで届いてる……もっと……もっと深く入れてぇ……」
勢いよく根本まで挿入されたのが余程気持ちよかったのか、甘い喘ぎ声を遠慮なしにあげている。その快楽は、俺も同じだった。こんな名器に慣れる訳がない。絡みつくヒダが、俺を数秒で絶頂へ導いてしまう。
「うっ……」
「ハウッ……熱いのが……熱いのが入ってくるぅ……ハァハァハァ……」
「……」
なんか直ぐにイッてしまったのが恥ずかしかった。しかし、里菜は色っぽく微笑むと俺の抱きしめ耳元で囁いた。
「凄く気持ちいいよ……キミも気持ちよかったんでしょ。気持ちよかったから出してくれたんでしょ……だからもっとキミのを頂戴。キミのオチ〇チ〇もっとしたいって言ってるよ……もっとできるでしょ。キミの美味しい精液もっと頂戴」
そう言いながら里菜は腰をグラインドさせて男根を刺激する。その刺激に俺の息子は小さくなっている暇もなかった。

「……中で出しちゃったけど、大丈夫なのか？」

今更そんなことを聞いても二度出してしまっているので遅いような気もするが、どうしても確認しておきたかった。

「大丈夫だよ。キミはなにも心配しないで。それより早く動いてぇ……こんな大きなの入れられてたら我慢できないよぉ……好きにしていいんだよ……ホラ早くぅ……」

心底ＳＥＸが好きな女だ。しかも、この吸い付くような肌、絡みつく秘裂、いくら二度出しているからといって油断すると直ぐに出てしまいそうだ。

「ハァハァ……いつもこんなことしてるの……」

なんとか会話で誤魔化そうとしたのだが、不味いことを口走ってしまった。しかし、失言を気にした様子もなく里菜は喘ぎながら答える。

「うん……ハァ、でも……積極的で優しそうな人じゃないと……ついて行かないよ……後……精力が強そうな人だけにね……キミ……精力強そうだったから……アウッ……入ってるだけで……気持ちがいい……ねぇ……少しでいいから動いて……このままじゃおかしくなっちゃうよ……イキたいの……お願いイカせてよぉ……」

なんと誘うのが旨いのだろうか、そんなことを言われたらどんな男でも言うことを聞いてしまう。俺は里菜の命令通り腰を動かした。射精しないよう気を付けながら時間を掛けて抜き、ゆっくりと根元まで挿入する。

「アアァァ……これ凄い……凄く気持ちいいのぉ……もうダメッ、イクッイクゥゥ……」

里菜の言うことは本当だった。一回ピストン運動しただけで躰を振るわせ秘裂から愛液とは違う雫を吹き出しながら絶頂を向かえてしまった。

「凄い……なんかキミとは……相性が会うみたい……凄く気持ちよくて、直ぐにイッちゃう……ハァハァハァ……気持ちよくしてくれたから私の名前教えてあげる。一度も教えたことなんて無かったんだけど特別だから

ね」

そう言えば自己紹介がまだだった。俺は、里菜の名前を知っていたが里菜は俺の名前を知らない。

「里菜って言うの……でも、名前だけ……名字は教えてあげないよ」

何故か恥ずかしそうに名前を告げた。裸を見せるより恥ずかしそうだが、その仕草がなんとも可愛らしい。

「俺の名前は――」

名前を言おうとした途端、里菜の唇が口を塞いだ。

「里菜は知らなくていいの……知らない男の人に犯される方が気持ちいいから……だから里菜のこといっぱい気持ちよくして……いっぱい里菜を犯して……」

ホント見事に男を夢中にさせるツボを知り尽くしている。この切なげな顔がたまらない。俺は夢中で里菜を犯した。『ミミズ千匹』の刺激は相変わらずだったが、二度出してることが次の射精を僅かだが遅らせてくれている。少しは余裕がありそうなので色々な体位を楽しんでみることにした。

里菜を四分の一回転させ、太股を抱えてサイドから攻める。

「アウウゥゥゥ……さっきより深い……お、奥に当たってるぅぅ……奥、気持ちいい……凄いよぉ……お腹の中掻き回されてるよぉ……ダメェェ……こんなのダメェェェ……イッちゃう……イッちゃうぅぅ……」

なんて感じやすい躰をしているんだ。十数回腰を動かしただけで絶頂を向かえベッドを汚していく。こうなってくると俺はＳＥＸが旨いんじゃないかと勘違いしてしまいそうだ。いや、確実に自信がついた。俺はこんなに女を喜ばすことができる！　これも里菜の掌で踊らされているだけなのだろうが、いい気になった俺の攻めは続く。

再び四分の一回転させドックスタイルで後ろから激しく攻める。里菜はこのスタイルを嫌がったが、俺の攻めに感じるようだ。

「ヤダッ……こんなのイヤッ……顔が見えないのはイヤなの……お願い止めて……」
「そんなこと……ないだろ。顔が見えなきゃ……それこそ誰に犯されてるかわからないだろ。もっと、感じるんじゃないのか……」
腰のビートを上げると喘ぎ声のトーンも上がる。
「ハアアアァァァ……そんな……アウッ……う、うん……そうかも……アッアッ……獣に犯されてるみたいで……気持ちいいかも……ううん……凄く気持ちいい……ダメ……また……」
どんな体位をとっても里菜はその度に絶頂を向かえた。俺も何度か中に放ったが、秘裂の刺激が強すぎて萎えるどころではない。
「ねぇ……お願い。横からして……もう一度、横から……それが一番……気持ちよかったの……お願い……して……してぇぇ……」
里菜を抱え上げガンガン攻めていたのだがリクエストに応えないわけにはいかない。俺は少し乱暴に抱えていた里菜をベッドに降ろすと脚を大きく開かせ横から攻める。
「アアアアッッッ……これ……これ好きぃぃ……」
悲鳴に近い喘ぎ声がホテルの小さな部屋に響き渡る。
「ダメェェェ……ダメェェ……もう……イッちゃう、イッちゃうの……お願い思いっきりイかせてぇぇ……」
最後の力を振り絞り、俺は全力で腰を動かした。乱暴にされればされる程快楽を感じる里菜は、全身から甘い香りのする汗を流し、秘裂からは大量の愛液を溢れ出していた。
「イクゥゥ……イッてるの……ハアアァァ……気持ちいい……気持ちいいのぉぉぉ……」
歓喜の喘ぎ声を聞きながら俺も思いっきり精液を放っていた。
蠢く秘裂は、まるで喉を鳴らして精液を飲み込んでいくようだった。それに感応するかのように全身が気持

ちよさそうに痙攣している。そして快楽に溺れた里菜の躰は意識を止めておくことができず、幸せそうな笑みを残し意識を失ってしまった。

「はぁはぁはぁはぁはぁ……スゲェ……」

こんなに激しいＳＥＸをしたのは初めてだった。これ程、心地よい疲労感を味わったのも……

俺は途轍もない疲労感を味わいながら、携帯電話をくれた謎のセールスマンに感謝し、里菜の後を追うように眠りにつくのだった。

2

続きは製品版で

あとがき

一年ぶりになりますが、お久しぶりの方は一年ぶり、お初の方ははじめまして泡蔵です。

今回は、新シリーズ魔道具（ブラックアイテム）第一巻「携帯電話」をお送りしました。

魔道具、ブラックアイテムとうたっておきながら、今回はタイトル通り携帯電話しか出てきません。しっかり「今回は」と前振りしているのは、当然二巻では他のアイテムが出てくる予定です。

しかし、「魔道具」を「ブラックアイテム」と読ませるのにはかなり無理があるのは本人も自覚しているところであります。「ブラックアイテム」と読ませたいなら「黒道具」とか「闇道具（これもチョット無理があるかな）」などにするとも考えたのですが泡蔵的にしっくりきた「魔道具」を採用しました。

「魔道具」を使いたいなら「デビルアイテム」とかにすればとお思いでしょうが、「ブラックアイテム」が最初に思いついてしまったし、響きも「ブラックアイテム」が一番良かったので漢字のイメージと読み方のイメージがかけ離れていることなど完全に無視しました。まぁタイトルを決める時に、良くある事なのでそこら辺は突っ込まないで下さい。突っ込まれてもどうしようもならないのです。なんと言っても作品の神は作者なので、作者の都合が良いように動いていくものなのです。

そして今回の小説なのですが、実は随分前に書いた作品の焼き直しです。今回の時代背景もその当時はオンタイムだったのですが、こうして時間を置いてしまったのでかなり古い物になっているのはご了承下さい。

でも泡蔵的に携帯電話をネタにするのなら、スマフォ全盛期の現在より２０００年代はじめの方が色々面白い機種が出てたのでネタにするのが簡単なんですよね。まぁスマフォでもネタは考えてあるのですが、今回の

小説とは年代がずれてしまったので没になってしまいました。

どうしても泡蔵のサボり癖が出てしまい。年に一冊しか出すことができていませんが、今年こそは何冊か出したいと思っております。新シリーズを銘打っているのだから今年中と言わず半年、いやもっと早い内に出していかないと行けないと思っています。

こんなことを言っていますが、本人でも大丈夫なのか？　と思ってしまいますが、第二巻のネタはしっかり仕上がっているので、サボり癖が出なければ早い内に出せるだろうと思います。

ホント思っているのですよ。

思っているのですけれど……

いや弱気なことは考えず必ず実現させますので、第二巻が出た際にはよろしくお願いします。

それでは魔道具（ブラックアイテム）第二巻「コンビニ」でお会いしましょう。

２０１９年一月某日　もうすぐ平成も終わりだなぁ～と考えながら――

魔道具シリーズ①

携帯電話

泡蔵

◇

表紙イラスト：ＫＵＮ

◇

制作日：2019-01-10

制作コード：EAWA-201901-MD001

制作元：Akny

ＨＰ：http://akny.sakura.ne.jp/index.html